
夢組～人の居ないクラス～

3007

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

夢組く人の居ないクラスく

【Nコード】

N0885C

【作者名】

3007

【あらすじ】

自分の都合ですが、この作品は長期休業しています。

卒業生の作文（前書き）

軽い残酷な表現出てくるので注意して下さい。

卒業生の作文

「このクラスは世界一怖い

一瞬で全てを灰にする火災

一瞬で全てを粉々にする地震

一瞬で全てを飲み込む津波

そんなのに負けないぐらいこのクラスは怖い

喜怒哀楽が最後まで無かった

クラスメイトなのに名前も知らない

一生の思い出が一つも無い

このクラスには人は居ない

このクラスにいた事で自分は自分を失った

このクラスはこの世に入らない

このクラスに居る奴も・・・

卒業生の作文（後書き）

初めて投稿したので読んだ人は感想や改善点を是非書いて下さい。

第一話：勝負開始

朝8時45分学校の鐘が教室に響いた。

普通のクラスは一斉に席に着く音や遅刻ギリギリの奴が急いでトビラを開ける音などでウルサイが夢組だけは違った。

一人で黙々と勉強する奴

一人で寝ている奴

一人で携帯をイジル奴

色々やってるけど一切笑顔も無ければ音も無い。これが夢組のいつもの光景だ。

しかしいつもと違うのは夢組に23人全員揃っている事だ。いつもは見た感じ10人ぐらいしか居ないクラスに全員居る。

何か変だなと思いつつ気にしないでいた、そして夢組の担任が来た。

「今日は皆さんに大事な物を渡します。」

「何があるんだ??？」

担任の声のトーン、今日の雰囲気。全てが変に感じ、悪い予感がする。

渡されたのはいつ頃から分からないが卒業生の作文だった。

「何があるんだ?」

おそらくそう感じたのは自分だけじゃない、周りの人もそう思うてるだろう。中身を読むと余計怖くなった、

「このクラスが怖い」

見た途端何か寒気がした。何か始まるしかも決して良い事では無い。これは予感じゃない100%何か起こる。そこまで確信出来る理由は分からない。

「でも・・・何か起こる」

そう感じた時学担任が口を開いた。

「これは夢組の初めての卒業生が書いた作文です。夢組の雰囲気は最初の頃から変わってません。」

いつもより強気な口調で言われた事が余計怖くなった

「この作文を皆さん最後まで読みましたか？」
いきなり弱い口調になった

「この作文の最後を皆さん読んで下さい。」

『このクラスに居る奴も』

これを言った時一瞬教室に一体感が出た。

「これがクラスです。これが普通のクラスです。これが友情です。」

その言葉には何か感じた事が無い重さ、切なさがあった。

そう・・・人が最後に残す言葉の用に。

「私が教えるのはコレが最後です。」

それを言うと服の中から銃を出した。

パーン

全員目を閉じた。

そして誰も目を開けようとしなかった。

そして

「キヤーーー」

女子の叫び声と共に全員目を開いた。

案の定周りには血が飛び散り頭には直径3ミリの穴が開いている担任が倒れてた

人は死体を見ると声は出さずこの現実を消そうとする。そしてそれが不可能だと分かると以外にも冷静になる。

「誰か救急車をよべ。」

お互いが名前を知らないため何も言えない。

そして一斉に救急車を呼ぶ

しかし電話が繋がらない。全員の電話が繋がらない。圏外でも無く、料金の未払いでも無い。

ただ口をそれえて同じ事を言った。

「あなたは人じゃない」 携帯が故障してもこんな事は言わない事は分かる。

すると教室にあるテレビが付いた。

「皆さん嫌な物を見せてごめんなさい。」

「お前誰だあ」

頭が混乱していたため強い口調になっていた。

「そんな怒んなって。」 相手は至って冷静だった。そのまま話しは続いた。

「君らがさつき見た作文の作者は僕です。僕は夢組が嫌いなのは皆さん知ってるよね？だからこれから僕と君ら夢組の命掛けの勝負を始めるよ。」

それを言うとテレビが消えた。

「命掛けの勝負・・・何が始まるんだ」

誰にも話し掛ける訳でも無くただ一人で呟いた。

キーンコーンカーンコーン

鐘の後に教室のスピーカーから

「命を捨てる覚悟は出来ましたか??? それでは勝負開始」

第一話：勝負開始（後書き）

初めての作品なので感想や改善点を是非教えてください。

第二話：帰りたい。（前書き）

文法におかした点があり読みづらい所があるかもしれませんが御了承下さい。

第二話：帰りたい。

「勝負開始。」そう言つと一旦間を置いたが話しは続いた。

「ルールは簡単です。僕の出す指令を皆さんで力を合わせてクリアしていくゲームです。指令を無視したりクリア出来ないと、誰かの命が無くなります。無くなる人は夢組の皆さんには関係の無い人です。つまり赤の他人があなた達の失敗により死にます。」

突然起きたこの状況を理解出来ぬまま話だけが進んでいる。

「指令を出す前に皆さんお互いの自己紹介をして下さい。恐らく名前も知らない事だろうし。」

それを言うときスピーカーから音が消えた。

「何なんだ。」
つい大声が出てしまった。周りの視線が一斉にこっちに来た。

「まず担任をどうにかしよう。」
初めて皆に話し掛けた。

「そつだな、どうする？」みたいな言葉が色々聞こえて来た。
以外にも大半の人が冷静になっている。

「まず救急車を呼ぼう。」それを言ったのは見た目は系の格好をして近づきにくい感じがあった。

以外な人からの言葉だったが驚いたり、不思議に感じる余裕が無かった。

周りが一斉に電話を掛ける

しかし携帯から聞こえるのはさっきと変わりが無かった。

「あなたは人じゃない」

その一言だけだった。

「何で繋がらないんだ」

「人じゃないってなんだ」

そんな言葉が飛び舞っている。携帯が繋がらないのが分かると皆黙り込んだ。無音の状態が二、三分経った時一人の女子が喋り始めた。

「担任が消えてきている」

女子で唯一冷静に発言出来ていた。しかも男でも見ない用にしていった担任の死体をじっと見ていた。

「足が消えてきている。」そういうと全員一斉に死体に目をやった。

「キャー」

女子の悲鳴が教室に響いた

死体の足だけ奇麗に無くなった。

教室全体が一瞬にして凍る

誰も声が出ない。

誰も動けない。

体に力が入らない。

ただ倒れこみこの現実を消そうとした。

全員が何も言えないまま時間が過ぎた。
すると又さっきの女子が口を開く。

「死体が無くなった。」

今度は一部の人しか見なかった。

確かに死体が無い。

死体だけじゃないあたり一面に飛び散ってた血も全て無くなっていった。

『何が始まってるんだ。』全員口をそろえて言った。

キンコーンカーンコーン鐘が鳴り終えたら又スピーカーから声がした。

「やっと死体が消えたよ、 疲れた。 皆さん早く自己紹介して下さい。 勝 負は始まってますよ。」

「何がしたいんだ。」 又強い口調になった。

しかし相手は冷静だった。

「勝負してるんだよ君ら夢組と僕が、さっき言っただろ。」

相手が冷静な分腹が経った

「勝負って何だ。」

又強い口調で言った。

「ルールは最初に言っただろ。」

相手は冷静に答えた

「……」

何も言えなくなった

「早く自己紹介しろや」

相手が急に怒り始めた

「それでは皆さん勝負を楽しみましょう。」

そういうとスピーカーから音が消えた。

「何なんだ……」

「まず今までの事を整理しよう。」

そう言ったのは還暦に近い感じの明らかなおじいさんだった。

(こんな人居たんだ。)

教室がそんな雰囲気になった。しかし誰もそれを言葉にしなかった。

そして皆が頭の中で今まで起きた事を整理し始めた。

(まず朝から色々変だと感じて、担任から夢組の卒業生の作文を配られて。それを読み終えたら担任が自殺して。その後この作文の作者が勝負だとか意味の分からない事言ったら、死体が消えて・・・)

何度も考え直したけど意味は分からないままだった。
ただ思った事。

(この場から逃げたい。)

「皆もう整理出来た？」
喋ったのはおじいさんだった。

「簡単に自己紹介しよう」おじいさんが自己紹介を始めた。
「岩隈茂56歳です。」それを言うと続々自己紹介を始めた。

「私は桜木鈴祢16歳」
あの冷静に死体を見ていた女子は意外にも自分と2つ下だった。

「俺は加藤風貴18。」系の人は自分とタメだった。

「中村勝16。」
誰の目を見る訳でも無く独り言の用に呟いた。

「佐々倉美喜です16です。」

怯えてる用に答えた。誰よりも大きい悲鳴を上げてた人だ。

「自分は田代勇氣28歳です。」

28歳とは思えない体付きでテレビで見る格闘家より強さを感じた。

そして周りが自己紹介を終えて自分の番になった。「自分の名前は飯田和樹18です。」

「皆自己紹介したよね。」岩隈さんが言うと、スピーカーから又鐘が鳴った。

キンコンカンコン

「やっと自己紹介終わったね。じゃあさっそく最初の指令をだそう。」

（この後に良い事が起こらない事ぐらい周りの皆も分かってるだろう。）

ああ・・・帰りたい。

第二話：帰りたい。（後書き）

読んだ人は感想や改善点をなるべく書いて下さい。

第三話：最初の指令（前書き）

感想で説明が足りないとの改善点を書いて下さった人が多数いたの
で、自分なりに解釈をし、そこに気を付けて書いてみました。

第三話：最初の指令

「じゃあ最初の指令を出すね」

自分で発明した遊びで皆と遊ぶみたいに楽しげに言った。

(他人の命が掛かっている勝負・・・とんでもない内容に決まってる)

今まで起きた事が現実だと分かり始めた数名の人は冷静に考えていた。

「最初の指令は、三時間以内に今いる夢組の誰か一人の夢を叶えてください」

さっきの楽しい感じを引きずったまま言った。

「・・・」

夢組に不思議な空気が流れた。

(これが命を掛けた勝負の内容・・・こんなので人の命が無くなる・

・・)

「ちなみに殺される人は　キダチ　ユウト君です
あっさりと言った。」

(誰だ・・・)

夢組全員が同じ事を思った。

「知ってる人は居ないね？じゃあ殺す人決定」

楽しくてしょうがないのか半笑いのまま言った。

「じゃあ勝負開始」

そう言つとクラスにあるテレビが付いた。

「アト　サンジガン德斯」

ロボットが喋った用な音が教室に響いた。

「じゃあ頑張つてね」

そう言つとスピーカーから音が消えた。

「何なんだ……」

自分が呟くと周りが騒ぎ始める。

「何なんだアイツ」

「何が始まつてるんだ」

やっと今起きている事が現実だと分かった人達の騒つきが無くならない。

「黙れ」

今までおとなしく現実を受け止めていた田代さんが怒鳴った。すると周りが一瞬にして静かになった。

全員田代さんの体格や雰囲気を感じ取ったのだろう。

「皆騒ぐのは分かるけど今は卒業生の言った通りにしよう。赤の他人だけど人の命が掛かってる」

皆に伝える用に言った

「そうですね、皆さん冷静になりましょう」

岩隈さんが言った。

大人の二人はすでに冷静に物事を解釈していた。

「それでは皆さんの夢を教えてください」

岩隈さんが言うつと続々に口を開く。

「俺の夢は歌手としてプロになる事」

胸を張って言った。

しかし名前も知らないし初めて見た人だった。

自己紹介の時にはまだ頭が整理出来ていなかったたので聞いてなかったのだらう。

見た目はバンドのボーカルをイメージさせる服装と髪型だった。

「私の夢は自分のクレープ屋を開く事です」

恥ずかしがりながら言った。

(この人も知らないぞ)

不思議に思いつつ周りを見渡すとまだまだ知らない人が一杯いた。
それだけ頭が着いて来て無かったのだろう。

(とりあえず特徴だけでも覚えて置こう)

知らない事が罪悪感に感じた。

見た目は賢い感じに見えた

次々と皆が夢を喋っていくが、自分は夢より見た目や特徴を覚えるのに必死だった。

24

そして自分の番になった。

「自分の夢は・・・」

言葉に困った。

(俺の夢って何だ?)

心の中で考えたが思いつかなかった。

「自分の夢は・・・まだありません」

それ以外の言葉が思いつかなかった。
周りからの視線が恐く感じた。

「無いなら仕方無いよ、そんな事より誰の夢を叶えるのが良い？」
岩隈さんが皆に聞いた。

「加藤のが一番良いんじゃない？」
そう言ったのは田代さんだった。

(加藤の夢・・・聞いて無かった)
又聞きそびれた。

「俺ですか？」
見た目は悪い感じの加藤も田代さんには頭が上がらない用を感じた。

「お前だよ」

今の会話で二人は何か感じた用だった。

「そうだね加藤君の夢が一番良いかもね。」

岩隈さんが言った。

周りの人達もうなづいていたから、自分も内容が分からないまま周りに合わせた

「じゃあ早速始めようか」

加藤がそう言うと周りの人達が端に除け始めた。

「お願いします」

見た目では考えられない丁寧な言葉使いだった。

加藤の目の中には田代さんと自分が居た。

すぐ様自分は端に除けた。

田代さん、加藤、両者の雰囲気が一気に変わった。

「時間も無いしさっさと始めるか」

田代さんが言うと負けじと加藤も

「お願いします」

丁寧な口調の中にも強さが感じた。

(これから喧嘩が始まるんだな)

心の中で自分なりに解釈出来た。

加藤の夢それは

「強い奴と喧嘩したいんですよ……田代さんみたいな人と本気で」

第三話：最初の指令（後書き）

読んだ人は改善点及び感想を是非書いて下さい。まだ日が浅いので改善点を出されると勉強になり嬉しいです。

第四話：加藤の夢

「強い奴と喧嘩したいんですよ・・・田代さんみたいな人と本気で」

丁寧な言葉使いの中に、威圧感があった。

「へえ〜珍しい夢だな」

相手にしていないのか、軽くあしらう用に言った。

「マジで言ってますよ」

丁寧な口調だが軽くバカにしている用な雰囲気だった。

「じゃあその内やる機会が出来たらな」

相手にしていないのか、適当に答えた用だった。

「調子乗んなよ、オッサンのくせに」

さっきの丁寧な口調とは打って変わって喧嘩を売った。

「お前が調子乗んなよ」

短い言葉で売られた喧嘩を買った。

その瞬間教室の空気が一瞬にして変わった。

「まあまあ今は止めておきましょう」

岩隈さんの一言で教室の空気が元に戻った。

しかし加藤と田代さんの間にはまだ不思議な空気が流れていた。

この瞬間誰の夢を叶えるか決まっていた。

こんな事が起きた事を知らない自分は、周りの雰囲気や加藤と田代さんの気持ち全て間違えて解釈していた

「お願いします」

加藤は、言うと同時に田代さんに向かって一気に迫っていった。

田代さんも攻撃の姿勢を取った。

ドスッ

何か鈍い音がした。

音と同時に目を閉じたので何の音が分からなかった。

そして目を開けると同時に

バアーーン

何か固い物に叩きつけられた用な音がした。

音の先にはヒビが入ったコンクリートの壁が有り、下には顔の数ヶ所から大量の出血し、背中を強く打った加藤が倒れこんでいた。

勝敗は加藤を見るとすぐに分かった。

「これで良いんだよね？」

田代さんが周りの人に共感を求める用に聞いた。

『……………』

全員が今起きた状況に口が開いたままだった。

するとボロボロな身体に加藤が田代さんめがけて言った

「ありがとうございます」

教室のガラスが揺れるくらい大きな声と100%の降伏の意味を込めて放った。

「ああ・・・」

いきなり大声で言われたので同様が隠せ無かった。

「シレイ クリア」

教室のテレビから聞こえてきた。

第四話：加藤の夢（後書き）

読んだ人は感想や改善点を是非書いて下さい。
稿の際に助かります。

今度からの投

夢組の人 パート1 (前書き)

今回はキャラ紹介なので物語には直接的には関係していません。

夢組の人 パート1

飯田 和樹 18歳

夢組の中で唯一無遅刻無欠席を達成している。
決断力が無く、良く周りの人に合わせる事が多い。
誰よりも命を大切にしている。
手が器用で細かい作業が誰よりも得意。

桜木 鈴祢 16歳

男子以上の根性と忍耐力を持っている。
死体を平然と見たり殴られる所を瞬きせずに見るなど常に冷静に
物を見る事が出来る。
意外に優しい所もある。

加藤 風貴 18歳

第一印象は 系ファッションに身を包んで何か近寄りにくい感じが
あった。
結構リーダーシップがある

野生の勘が結構冴えてる。

田代 勇気 28歳

30間近とは思えない程体が完成している。
見た感じはプロ格闘家以上に強さを感じる。
田代がキレると誰もが黙り込む。
加藤が最も尊敬している人

岩隈 茂 56歳

最年長で何かあると仕切り役になる。
還暦近いが口うるさく無く話を通じる。
昔は結構悪かったらしい。

中村 勝 16歳

常に怯えている。
おとなしく、人の目を見て喋る事が出来ない。
仲間意識が結構高くイザという時は頼りがいがある。誰にも言えな

い秘密がある

佐々倉 美喜 16歳

臆病者で軽い事でも大声を出して驚く。
色々な雑学を知っていて役に立つ事がある。

夢組メンバー

男 23名

女 5名 計28名。

夢組の人 パート1（後書き）

感想や改善点などは是非書いて下さい。

第五話：指令クリア

「シレイ クリア」

全員がテレビに目をやる

「クリア オメデトウ」

何か不思議に思いつつも全員がホットした表情に変わった。

キンコーンカーンコーン

又鐘が鳴るとスピーカーからアイツの声がした。

「すごいね残り一時間もあるよ。やっぱり簡単すぎたなあ」

後悔した感じもあつたが何か楽しんでいる用にも感じた。

「じゃあ予定よりも早く終わっちゃったから一時間休憩ね」

そついつとスピーカーから音が消えた。

「とりあえず一件落着で良いんだよな？」

田代さんが皆に聞いた。

「これで良いんですよ」

岩隈さんが答えると周りの人達も首を縦に振った。

すると後ろから大声が聞こえた。

「イツテエ」

大声の犯人は加藤だった。

「お前キズ口触んなよ」

そこには加藤を看病している桜木が居た。

「うるせえな。やって貰って文句言つな」

桜木は怒りながらも手慣れた用に看病を続けた。

「よじっ！これでOK」

そう言うと桜木は満足そうな顔をした。

「ありがとうな」

加藤は恥ずかしそうにお礼を言った。

すると田代さんが

「お前大丈夫か？悪いなケガさせて」

「大丈夫です。これぐらいのキズすぐに直ります」

すると桜木が加藤のキズ口を蹴る。

「イツテエー」

加藤が苦しむ。

「何が大丈夫だよ。バツカ見てえ」

桜木が笑いながら言う。

それを見ていた周りの人も微笑ましそくに笑う。

夢組が何か良い感じになった。

「あの・・・ちょっと良いですか？」

自分は今まで思っていた事を言った。

「今まで自分は毎日学校に来てました。

でも今まで誰とも話した事がありませんでした。

正直夢組に入学した事を後悔していました。

でも今日の皆さんを見ていたら何か・・・入学して良かったと思いました」

自分の気持ちを皆にぶつけた。

「実は自分も同じ事思っていました」

「私も同じ気持ちです」

「俺もだよ」

周りの人が一斉に口を開いた。

皆同じ事を思っていると分かったら嬉しかった。

「皆の事をもっと知りたいです。

正直名前を聞きそびれた人が一杯います。

個人的な事で悪いんですがもう一度自己紹介してくれませんか？」

周りの人達の事を知りたい。その気持ちしか無かった

「お願いします」

皆に頭を下げた。

すると周りから次々と自己紹介が始まった。今度は聞きそびれが無いように真剣に聞いた。

「俺は山本哲也17歳」

バンドのボーカルみたいな人は俺と一個下だった。

「私は加西優子です18歳です」

クレープ屋を開くのが夢と言った人だった。

「自分は木村優矢18歳」

体形は何か格闘技をやっている用で中々のガタイをしていた。

「山田太郎です20です」誰よりも笑顔で喋った。

次々と自己紹介をしてくれた。

「ありがとうございます」

深々とお辞儀をすると 自分も自己紹介した。

「自分は飯田和樹18歳です本当にありがとうございます」

それを良い終わると

キーンコーンカーンコーン鐘が鳴るとアイツの声がした。

「休憩終了！じゃあ次の指令を出すね」

よっぽど自信があるのか言いたくてムズムズしている用だった

「待て！」

田代さんが話を無理矢理止めた。

「お前は俺達の名前をしっている。ならばお前も名前を教えろ」

そう言うつとスピーカーから冷静な声で答えた。

「名前ねえ・・・その内分かるよ。」

軽く笑いながら言った

「ふざけんな」

田代さんが激怒した。

「そんな事より次の指令の内容はある人を一週間以内に捜してもらいます」

「・・・」

周りが黙り込む。

最初の指令の内容とは打って変わって急に難しくなった。

「探す人はヤマナカ ショウタ君です」

(誰だ?)

全員がそう思う。

「たなみに今からこの地球にあなた達を助けてくれる人はいません。居るとしたらここに居るメンバーだけです」

いきなり意味の分からない事を言い出した。

「何言ってるか分からないでしょ? まあ行動に移すと分かるから」

話だけが進んで頭が着いて来ていない。

「ちなみに君達が失敗して殺される人はサクライ ヤマト君です」

「じゃあ勝負開始」

そう言つとスピーカーから音が消えた。

「.....」

全員が今起きた事を理解出来ていなかった。

「とりあえず今起きた事を整理しましょう」

岩隈さんが言つと全員が整理し始める。

（ヤマナカ ショウタと言う人を一週間以内に捜す。そして助けてくれる人は一人も居なく夢組のメンバーだけでどうにかしないとけない）

整理は出来たが意味が分からない。

そして数分経つた頃全員が顔を上げた。

「皆さん大丈夫ですね」

岩隈さんが言つとテレビから又ロボットの用な声が聞こえて来た。

「アト イツシュウカンデス」

第五話：指令クリア（後書き）

今回は色々話が変わり読みづらい所があったと思いますが、その点は改善するので是非改善点を書いて下さい。
改善点だけで無く評価の方も是非お願いします。

第六話・ヒント

「アト イツシュウカン デス」

ロボットの声が教室に響く。

「どつしまししょう？」

岩隈さんが皆に聞く。

しかし皆何も言わない。誰も人捜し何てした事が無いから何も言えないのだ。

全員が黙り込み、教室内に不思議な空気が流れて、2〜3分経った頃、教室のテレビから又ロボットの声が出た。

「みんな ゲンカン」

その声と共に全員がテレビに目をやる。

「みんな ゲンカン」

『……………』

誰も理解出来ていなかった。

「みんな ゲンカン」

「ゲンカン ヒント」

「みんな ゲンカン」

・
・
・

テレビからは同じリズムで同じ事を繰り返している。

「とりあえず玄関に行けば良いんじゃないか？」

全員がキョトンとしている中、田代さんだけは冷静にロボットの言っている意味を理解していた。

「そうですね、行動に移さないと何も始まりませんしね」

岩隈さんが言うと全員が納得した用に行動に移す。

「待て！」

田代さんが言うと全員の動きが止まる。

「バラバラだと危ない。男子を前と後ろにして女子を真ん中にしよう」

田代さんはすでにこの指令が危ないのを把握したのか、やけに冷静になっていた。

男子が女子を守る形で玄関まで行く。

この学校、蝶華高校は四階建てになっている。夢組は最上階にクラスがあり、玄関までには目の前にある階段を降りたらずぐに行ける。

「何かが変んだと思いませんか？」

佐々倉が何か怯えながら言った。

「確かに何かおかしいな」

田代さんが言うつと周りの人達も同じ用な事を言った

(確かに何かがおかしい)

自分だけじゃなく周りの人も全員考えながら歩き続けた。

「分かった。静かなんだ」

イキナリ言ったため、周りの人が驚く。

蝶華高校は夢組意外に普通科が7クラス、理数科が3クラスある、計415人居る。しかし音が一切しない喋り声はもちろんノートをめくる音、イスを引く音、何にも音がしない。

「音が全く無いんだよ。人が1人も居ないんだよ」

自分が言った事は事実だが、周りの人は不思議な目で自分を見つめていた。

しかし軽く時間が経った時頭で、この現象を現実だと分かった人は自分の言った事に共感を持ってくれた。

「そっぴゃけに静かだな」

「人が居る気配が全くしないな」

周りがパラパラ言い始める。

周りが次々と異変に気付くと、さっき言われた事を思い出す。

「あなた達を助ける人はいません」

やっと意味が分かった。

「そういう事か・・・」

今思うと人が1人も居ないのが納得出来る。

担当が自殺した時に響いた銃声、田代さんと加藤が喧嘩した時に響いた殴音、色々な音がしたのに、誰も来なかった。

それを考えると人が居ない事が証明出来る。

全員が異変の意味をしようと黙り込み、動きが止まる。

当たり前である、この学校ならまだしもこの世界に仲間が居ないのだから。

「皆の気持ちは分かるけどとりあえず玄関に行こう、行ったら何かがあるのは事実だから」

加藤が重い空気の中、自分の考えを言った。

「そうだな、今は玄関に行くのが一番良さそうだな」

田代さんが言うと、周りの人達が段々と明るい表情になる。

「じゃあ気を引き締めて出発！」

岩隈さんがそう言うと周りの人達が笑った。

そして玄関に着いた。

しかし、いつもと変わりが無い感じた。

「何も無いな。ちょっと探すか」

田代さんはそう言うと玄関の周りを探し始める。

それを見ていた加藤・木村も探し始める。

他の人達が同じく探そうとすると

「もしかしたら変な物が出てくるかも知れないから、なるべく動かないでくれ」

加藤が言うと残っていた人達がその場に座り込む。

そして田代さん、加藤、木村が一生懸命探していると夢組が使っている下駄箱の中になにかがあった。

「田代さん、木村君、何か下駄箱に入ってます」

加藤がそう言うと田代さん木村が下駄箱に集まる。

夢組一人一人の下駄箱に何か一つずつ入っている。

「とりあえず俺の下駄箱を開けてみるか」

田代さんがそう言うと三人が田代さんの下駄箱に近づく。

「じゃあ開けるぞ」

田代さんがそう言うと三人の表情が強ばる。

「いち・いの・さん」

一気に扉を開けると中には綺麗に飾り付けされている白い袋が入っていた。

「これ何だ？」

三人が同時に言うと、三人の中に、嫌な空気が流れる。

「なあ良くテレビとかの場合、この光景って大抵爆弾入っているよな」

田代さんがそう言うと二人の顔に脂汗が流れる。

「変な事言わないで下さいよ」

加藤が無理に作った笑顔で言う。

「お前ら覚悟は出来ているか？」

田代さんが二人に聞くと二人は縦にうなづく。

そして田代さんが全神経を集中させて白い袋を出す。
そしてゆっくりと振動を出さない用に下に置いた。

(ふう〜〜〜)

三人の間には安心した空気が流れた。

そうすると、今度は一気に口を開けた。

すると中には見た事も無い機種の携帯・何か書いてある本・特殊と赤い文字で書いてある手帳・そして普通のペンとメモ帳が入っていた。

「何だこんなのか」

腰を抜かした三人が同時に言う。

そして全員の下駄箱から袋を出して下に置き、皆を呼んだ。

「皆こっちに来て下さい」

加藤がそう言うと、皆が動き始める。

そして皆が集まった。

「皆の下駄箱にこの袋がありました。テレビから聞こえたヒントと言葉は恐らくこれだと思います」

木村が言うと田代さんが一つ一つ皆に渡した。

中身は全員一緒だった。

「皆貰ったよね？」

田代さんがそう言うのと全員うなずく。

「じゃあ次どうしますか？皆さん」

田代さんがそう言うのと全員が黙り込む。

「とりあえず今考えましょう」

岩隈さんがそう言うのと、さっき皆が居た所に戻り、その場に座った。

岩隈さんが座ると続々と元の場所に行き、座った。

そして皆が元の場所に戻ると、岩隈さんが口を開く。

「じゃあ皆さんどうしますか？」

岩隈さんが言うのと桜木が口を開く。

「とりあえずアイツが言うにはヤマナカ ショウタって人を一週間以内に探さないと、人が死ぬんだろ？じゃあこんな事で時間使ってる暇は無いんじゃない？皆で捜せば良いんじゃない？」

そう言うのと加西が口を開く。

「確かに時間が無いのは分かるけど、全員で捜しに行くと、余計効率が悪くなるよ」

加西がそう言うと桜木が口を開く。

「じゃあ皆で早く案を考えよう」

そう言うと全員考える。

そして皆が考えてると、岩隈さんが口を開く。

「男を中心とした30人が外で捜して、残りの5人でヤマナカ君の情報収集するのはどう?」

岩隈さんがそう言うと全員が賛成の顔をした。

「じゃあ教室に残る人を決めよう」

岩隈さんが言うと、皆が意見を言い始めた。

その結果残る5人が決定した。

加西 優子 岩隈 茂

佐々倉 美喜 佐藤 空

そして自分。

「じゃあ全員が一緒に又、会える用に命に気おつけて頑張りましょ
う」

そう言つと全員が行動に移した。

第六話・ヒント（後書き）

今回はちょっと長めなので読むのに苦労したと思いますが、最後まで御朗読ありがとうございました。

夢組の人 パート2 (前書き)

今回はキャラクター紹介なので物語には直接的には関係無いです。

夢組の人 パート2

山本 哲也 17歳

将来の夢はプロの歌手になる事。

芸能事務所に入っているがプロデビューするには高校卒業が最低条件だと言われたので夢組に来た。

暗算で世界大会優勝の経歴を持つ。

加西 優子 18歳

頭が良く米国の某有名大学付属高校からスカウトが来ていたが、それが原因で親との縁を切った。

自分がやりたい事を探すために、一番自由な夢組に入学した。

全国模試で3年連続1位など色々記録を持っている。IQ190も持っている完璧な天才型。

木村 優矢 18歳

小さい頃から色々な格闘技をやっていたのでガタイが凄い良い。力だけでは無く、運動神経が凄く良い。しかしあんまり頭が良くないために夢組に来た。

山田 太郎 20歳

何があっても常に笑顔でいる。家の都合で高校にいけず、中学卒業の時点で働いた。しかし今になってから学校に行きたくなり、夢組に入る事にした。昔は全く笑わず短気だったががある事を境に笑顔を絶やさなくなった。

佐藤 空 18歳

困ってる人が居ると、自分を犠牲にしても助ける程、情に熱い。人の役に立つ仕事をしたいと医者をめざし、医学部に入学するが、医者になるためには色々あると分かり挫折する。しかし、ある人の話を聞いて、人間心理学のプロを目指す用になった。心理学科に入るより、独学でやる方が良いと、ある人に言わ

れ自由な夢組に入った。
ちなみにある人とは夢組の卒業生である。

夢組メンバー

男子23人

女子5人 計28人

夢組の人 パート2（後書き）

最後まで御朗読ありがとうございます。次回の投稿は6月10日を予定しています。

第七話・ヒントの意味

「じゃあ全員が一緒に又、会える用に命に気おつけて頑張りましょ
う」

岩隈さんが言うと、皆がそれぞれの行動に移した。

「まずどうしますか？」

岩隈さんが残ってる人達に聞く。

「とりあえずパソコンで調べてみますか？」

自分が言うと皆うなずいた。

「そうですね」

岩隈さんが言うと皆が行動に移した。

そして、パソコン室に着いた。

「どうしますか？」

加西が皆に聞いた。

『……………』

全員黙り込んだ。

パソコンは良く使うが、こんな事に使った事が無いので何をしたら良いか分からない。

「どうしましょう……………」

岩隈さんが分からないと誰も何も言えない。

そしてパソコン室に異様な間が流れた。

すると

ヴーヴーヴーヴーと携帯のバイブが鳴る。

「携帯が鳴ってる」

いつもなら何にも思わないが、今までの事があったので異常に驚

いた。

ブーブーブーブー

携帯は鳴り続けている。

「速く出ないと」

加西が言うと、やっと携帯を開いた。

そこには「加藤 風貴」と書かれていた。

「加藤からだ」

独り言の用に言うと同時に携帯に出た。

「もしもし」

疑う用に出た。

「お前出んの遅えよ」

完璧に加藤だ。

「悪い。ちょっと焦ったからさあ」

加藤だと分かると安心出来たので、普通に会話出来た。

「まあ良いや。情報收拾の方進んでるか？」

加藤は最初から落ち着いていたので普通に聞いてきた。

「全然ダメ。何を調べれば良いか分からない」

自分はごまかす事無く真実を言った。

「やっぱりかあ・・・」

加藤は予想していた用に言う。

「ああ・・・悪いな」

加藤が怒らない分罪悪感があった。

「いやいやあ謝るな。俺も何も進んでないから」

加藤も全然進んでいなかった。

「とりあえず駅前に居るんだけど、金も無ければ何処に行けば良いか分からないから電話したんだ」

おそらく加藤以外の皆も何をしたら良いか分かって無いだろう。

「そうか・・・」

何を話して良いか分からない。

「じゃあ、お互い頑張ろうな」

加藤も何も言えないのか電話を切ろうとする。

「ああ・・・じゃあな」

そう言つと自分から携帯を切つた。

「どつという用件だったんですか？」

岩隈さんが聞く。

「あつちも進んで無いそうです」

自分は加藤との会話を簡潔にまとめた。

「そうですか・・・」

岩隈さんの表情は何か残念そうだった。

「まあ頑張らしましょう」

自分は皆に言った。

すると皆は元気良くなさずいた。

「あのお袋の中身調べませんか？」

加西が皆に聞いた。

(そういえば袋の中身がヒント何だよな。それなら何か分かるかも知れない)

おそらく皆同じ事を考えてるだろう。

「そうですね、調べましょう」

岩隈さんが言うと全員中身を出し始めた。

中身は皆変わらず、携帯・本・手帳・ペン・メモ帳が入っていた。

「これ何だ？」

中身には不思議に思わないが、入っている理由に不思議だと思った。

「じゃあまず携帯から調べましょうか」

岩隈さんが言うと、全員携帯を開く。

見た事も無い機種だが、中身は極普通の携帯と変わりわない。カメラ機能が有り、メモリには夢組全員の番号とアドレスがある。

「どつやらコレはお互いの情報交換の時に使うみたいですね」

岩隈さんが言うと、全員が首を縦に振る。

次は本だ。

80ページ有り、大きさは大学ノートぐらいだ。中身は、公共の乗り物の時刻表が10ページ、緊急時の対処法と書かれているタイトルページが30ページヤマナカ ショウタの特徴が書いてあるのが40ページ。

そして裏表紙に赤文字で、「サクラ サク」と書かれている。

「どうやらこれは、外で探す人達が使う物みたいですね。最後の文字は恐らく、ヤマナカ ショウタの正体を現す、合い言葉か本人の居場所を表すヒントのどっちかですね」

加西が言うと、全員が首を縦に振る。

次は手帳だ

表紙に赤い文字で特殊と書かれている。最初のページには今日から一週後まで有効と書かれていた。他は軽いメモ欄があるぐらいで薄く、胸ポケットに入るぐらいの大きさだ。

「恐らくこの手帳は、何かが無料になったりする物だと思います」

佐々倉が言うと、全員が首を縦に振る。

次は手帳とペンだ

普通に売ってる手帳とペンだ。特に不思議な点も無い。

「これは・・・メモと書くペンですね」

皆がある程度推理をしているのに、自分があっけない物だったか

ら何となく嫌だった。

「この物を見てると、卒業生の人には恐らく、この人捜しによっぽど自信があるのか、成功するのを望んでいるかのどっちかですね」

周りが感心した用に佐藤に目をやる。

「あっ予想ですけどね」

佐藤は皆の視線を感じてビックリしたのか、慌てて言い訳をした。

「いやいやぁ予想でもスゴいよ」

岩隈さんが言うつと周りの人達もうなずく。

「ちょっと人間心理学を勉強してるので」

佐藤は恥ずかしがりながら言った。

『へえ〜』

全員が感心する

「そんな事より、ヒントの意味を皆に教えよう」

佐藤が話を変える用に言う。

「そうですね」

周りも佐藤の気持ちを感じて、佐藤の意見に賛同した。

そして学校に残ってる人達は外で捜してる人達に、連絡をいれる。

全員に連絡が付くと、学校に残ってる人達は安心と達成感で満ち溢れていた。

「とりあえず、最初の仕事完了ですね」

岩隈さんが言うと教室に安心した空気が流れた。

第八話：人捜し（前書き）

今回の語り手は飯田から加藤に変わっています。

第八話：人捜し

学校に残ってる人達から外で捜す人達に連絡が来る

内容はさっき見つけた袋の中身の使い方だ。

使い方を聞くと、どうやらヒントは捜す立場の俺達が使うものが
多いみたいだ

「サンキュー」

そう言つと、電話を切った。

(教室に残ってる人達は頑張ってるなあ・・・俺も頑張るか)

俺は何か申し訳無い気持ちになった。

「シャアアアア！」

俺は気合いを入れ直した

(・・・)

気合いを入れたが、俺はどうしたら良いか分からなかった。

(とりあえず誰かに連絡を入れるか)

俺は心の中で言うと、田代さんに連絡を入れる。

「田代さん。すみません、俺達は何をしたら良いんでしょうか？」

俺は申し訳なさそうに聞いた。

「お前も分からないか。俺も何をしたら良いか分からない」

田代さんは恥ずかしさを隠すために笑いながら言った。

「田代さんも分かりませんか・・・」

田代さんも分かっていたいなかった事で俺は少し安心出来た。

「何人かに連絡を取ったけど、皆も分かっていたぞ」

（皆も分かっていたのか）

「とりあえず、皆を一旦集めませんか？」

俺は皆の意見を聞くと、何か分かってくるかもしれないと思った。

「そうだな。皆の意見を聞くと、何か分かってくるかもしれないかな」

田代さんも同じ事を考えていた。

そして、俺と田代さんで皆を駅に呼んだ。

そして皆が駅に着いた。

「皆さん、集まってくれてありがとうございます。これからの行動を話し合おうと思ひまして、皆を呼びました」

俺がそう言つと嫌な顔をする人は居なかつた。

「これからどうしたら良いと思ひますか？」

俺は皆に聞くと、山本が口を開く。

「日本の何処かに居るなら何個かに別れて、捜すのが一番良くないです？」

山本の意見に皆が賛同した。

そして話し合ひで7つのグループに別れた。

俺のグループは俺以外に桜木、山本で東北地方を捜す事になった。

「お前と一緒にだよ」

桜木が俺に向かって言う

「それは俺が言う権利があるだろ」

俺も負けずと言い返した

「まあまあ仲間割れは止めましょう」

山本が仲介に入る。

「山本。お前大変になりそうだな」

田代さんが笑いながら言う。

「いやあ大丈夫ですよ」

山本も笑いながら言う。

そして、ダラダラと何分か話していると、やっと皆腰を上げて行動に移した。

「言うの忘れてた」

田代さんが言うつと皆の動きが止まる。

「手帳あるじゃん、アレがあると公共の乗り物がたタダになるみた

いだから」

田代さんが言うと皆手帳をポケットに入れた。

「それと小さい事でも何かあったら連絡取ろうな」

そついつと皆は返事をした。

「じゃあ皆頑張ろうな」

『はい』

皆が言うと、田代さんは微笑み返した。

「じゃあ東北に行きましょう」

山本が言うと、俺達も行動に移した。

「足引つ張るなよ」

桜木が俺に言う。

「お前がな」

俺も桜木に言う。

「二人は仲良いですね」

山本が俺に言う。

「こんなガキと仲良くしたくねえよ」

俺が山本に言うつと一瞬、桜木の顔が何か悲しげな表情になった用に見えた。

「それはこつちのセリフだよ」

桜木はいつもの用に言い返してきた。

「まあ仲良くしましょう」

山本が言うつと、俺と桜木はお互いの目を見て、笑った。

そして、キップを買う所に着いた。

「なあコレがあれば、金いらないんだよな」

俺は二人に言うつと、二人も不思議な顔をした。

「車掌さんに見せると良いんじゃないんですか？」

山本が言うつと俺が試しに見せてみた。

「あのお・・・コレ」

俺は車掌に見せた。

「あつ。かしこまりましたすぐに手配します」

そう言うと居なくなった

『すげえ』

三人が口をそれえて言う

そして二人も見せると、行った事も無い地下に連れていかれた。

「こんな所があるんだあ」

俺だけじゃなく二人も驚いてる。

「今回は何があったんですか？」

車掌さんが俺達に聞く。

「人捜しです」

俺が言うと二人が笑った

「へえ。頑張ってください」

車掌さんが言うと俺達は戸惑いながら返事をした。

そして500メートルぐらい歩いたら目の前に新幹線があった。

「では失礼します」

そう言つと車掌は帰り始めた。

そして俺達は目の前の新幹線に乗った。

「何かスゲーな」

俺はずっと興奮していた

「さっきから興奮しすぎだから」

桜木が言つと俺は恥ずかしくなった。

「まあ興奮するのが、普通ですよ」

山本がかばうと余計恥ずかしくなった。

「まあこれから何があるか分からないけど一緒に頑張ろうな」

俺は恥ずかしさを隠すために二人に言った。

「もちろんです」

「当たり前だろ」

二人が答えた。

すると三人の間に笑いが起きた。

そして、中で色々話したりしていると、新幹線からアナウンスが聞こえた。

「宮城に着きました」

そして俺達は新幹線から降りた。

「これから始まるな」

「これからですね」

「これからだな」

一人一人言うと、三人して大爆笑した。

そして笑い疲れると、三人そろって歩き始めた。

第八話：人捜し（後書き）

今回の話しで、人を捜す時の案は色々な作者の皆さんから頂きました。とても心から感謝しています、ありがとうございます。

第九話：人捜し（2）（前書き）

今回は眞名など色々出てきてますが、全く関係の無いウソの内容なので、ご了承ください。

第九話：人捜し（2）

俺達は歩きながら片っ端に話し掛けた。

「あなたはヤマナカ ショウウタですか？」

イキナリ言われて驚いた人も居たら、不思議な顔をして無視をした人も居る。

「やっぱり簡単には見つからないな」

俺が言うと二人もうなずいた。

そして片っ端から話し掛けて行って2〜3時間経った。

「一旦休まねえか？」

桜木が言うと俺達も疲れていたから賛同した。

そして近くにあつたベンチに腰を降ろした。

「なあ、片っ端から話し掛けてもキリがないぜ」

俺が言うと二人も軽くうなずく。

「でもコレ以外方法が無くないか？」

桜木の言葉に何も言えなかった。

「確かヒントの本に特徴書いてありましたよね？」

山本が言うと俺と桜木は袋から本を取り出した。

そこには犯罪者の似顔絵の用な感じで、顔の特徴が細かく書かれていた。

しかし顔の特徴が分かってても、何処に居るかも検討が付かない。

「なああんまり意味無くないか」

俺は思わず口に出してしまった。

「やっぱり・・・意味無いですよね」

山本は笑いながら言ったが目は悲しんでいた。

「いやぁコレは凄いヒントだよ」

桜木は何か思いついたのか自信満々で言った。

「この顔の人を捜せば良いんだろ」

桜木はそう言うと、誰かに電話を掛け始めた。

「ああ美喜？ちょっと調べて欲しいんだけど」

そう言うと、桜木は俺と山本を無視して話し始めた

そして、十分ぐらい経ったら桜木は電話を一旦切った。

「お前、何をしてんだ？」

俺は桜木に軽くキレながら聞いた。

「顔が分かるって事はアイツの知り合いだろ？それなら夢組の卒業生の可能性がある。そう思って今、夢組の卒業生の名前を捜して貰っているんだよ」

桜木は軽く自慢気に言った。

「お前スゴいな」

俺は桜木が以外に頭が良いのに驚愕した。

「まあ普通の事だろ」

桜木は笑いながらも自慢気に言った。

そして二時間ぐらい三人で次の経路や、本の裏表紙に書いてある文字の意味に付いて話し合っていると、桜木の携帯が鳴る。

「もしもし。分かった？」

桜木はそう言うとメモを取りながら、話し続けた。

「アリガトウね」

桜木はそう言うと携帯を切った。

「どうだった？」

俺は桜木に聞いた。

「3人居た。そして1人は鹿児島、もう1人は福岡、そして宮城に1人居る」

桜木はそう言うと次々に又、電話を掛ける。

そして、電話を掛け終わると、俺達に話し始めた。

「それで、宮城に居る奴はゲーム関係の会社に就職したみたいだから、ゲーム会社に行けば何か分かるかもしれない」

桜木がそう言うと、早速行動に移した。

宮城にはゲーム関係会社が5社ある。

俺達は片っ端から聞き込み調査を始めた。

そして4社目で、ある情報を得た。

「ヤマナカ ショウウタなら3ヶ月前に辞めたよ」

ゲーム会社の社員さんが言ってくれた。

「そうですか・・・ちなみに辞める時に何か言ってませんでしたか？」

山本が聞くとゲーム会社の人が答えてくれた。

「うーん・・・絵を書くとか言ってたな」

そういつとお礼を言ってゲーム会社を後にした。

「よしっ！段々分かってきた」

俺が言つと、桜木と山本もうなずいた。

「とりあえず今度は、景色が良い所を片っ端から探すぞ」

そう言つと、俺達3人は走り出した。

しか中々見つからない。

「やっぱり簡単には見つからないな」

俺が言うと、桜木と山本も夕メ息を付く。

「なあ・・・腹減らないか？」

桜木がそう言うと俺の腹が鳴った。

「確かに」

俺がそう言うと、歩いて来た道を戻り始めた。

「何か喰いたい物ある？」

俺が二人に聞くと牛タンと答えた。

「じゃあ牛タン喰うか」

俺がそう言っていると、3人で店を探した。

「ここで良くないか？」

俺が止まった所には、昔からやってそうな感じの店だった。

「何か汚い」

桜木が言っていると俺は言い返した。

「バーカ！こういう店が一番ウマイんだよ」

正直俺も汚いと思った、いつもなら絶対入らない用な店なのに、今回だけはココが一番だと思った。

「まあ喰えれば良いや」

桜木はそう言っていると、一人で店に入った。

そして、俺達も店に入る

「牛タン定食3つ」

そう言っていると、俺達3人はワクワクしながら牛タンを待っていた。

そして、10分経ったら俺達の前に牛タンが置かれた。

『いただきます』

3人揃って言うと、何も言わずにガツガツと食べる

そして俺が一番速く食べ終えた。

「お前味わえよ」

桜木がそう言うと、俺は笑って答えた。

そして、二人が食べ終えるのを待った。

俺は二人が食べ終えるのを待つ間、店の雰囲気を見ていた。すると店に飾ってある桜の絵が目に入った。

(この桜の絵何か引っ掛かるな)

俺は何故か絵が気になっていた。

そして、ピーンと来た。

「分かった」

俺はそう言うと、本の時刻表を調べた。

二人は俺の行動を不思議な目で見ています。

「お前何してんだ」

桜木が言うが俺は時刻表を見るのに必死で気付かなかった。

「オイッ」

桜木が強めに言うと要約気付いた。

「ああ悪い」

そう言つと俺は思った事を言った。

「なあ青森に行くぞ」

そう言つと、二人は不思議な顔をした。

「桜見に青森行くぞ」

俺の勢いに押されたのか二人は何も言わずに、うなずいた。

「じゃあ行動開始」

俺がそう言つと、二人は手帳を店主に見せた。

「分かりました」

店主がそう言つと、俺達3人は急いで駅に行った。

そしてさっきと同じく、駅の裏の道を歩いた。

「ギリギリセーフ」

そう言うと、俺達はイスに腰を駈けた。

「なあ何で青森だと思ったんだ？」

桜木が俺に聞いた。

「うん・・・勘かな」

そう言うと二人は啞然とした表情をし。

「勘ってお前・・・」

言葉を失っていた。

「大丈夫。俺の勘は当たるから」

そう言うと、二人は飽きた顔をした。

「まあ大丈夫だ。信じる」

そう言うと、二人は笑い始めた。

そして、新幹線は青森に向かう。

第十話：人捜し（3）

新幹線が青森に向かう中で俺達は色々な話しをしていた。

「好きな食い物なに？」

「アイドルで誰が好き？」

数学の時間に近くに居る友達と話す内容で、とても人の命が掛かっているとは思えない内容だった。

そして、意味の無い話しに華を咲かせていると、新幹線が青森に着いた。

「じゃあ花見に行くか」

俺が言うと、二人は目が点になっていた。

「花見ってお前・・・今は6月だぞ」

桜木が言うと、山本も同感した。

「まあ今から花見に行くのも結構良いぞ」

俺はそう言うと、歩き始めた。

俺が歩き始めると、二人も渋々着いてきた。

「なあ、何処に向かつてるんだ？」

桜木が俺に聞く。

「うん……何処だろうな」

二人の顔が一気に怒りの表情になった。

「お前いい加減にしろよ」

桜木がマジでキレた。

「キレるのは分かるけど、今は俺に着いてきてくれ。頼む！」

俺は自分が考えている事にかなりの自信があった。

「分かったよ」

俺の熱意に押されて、桜木は怒りを沈めた。

そして、俺は黙々と歩き続けた。

「あつた！」

俺はボンヤリと見える山の頂点にある大きな木を指指した。

「お前・・・あそこまでって、軽く10キロあるぞ」

桜木は飽きた表情をしていた。

「10キロあるなら10キロ歩けば良いじゃん」

俺は居るとか居ないとか関係無く、ただ行きたくて性が無かった。

「歩くって・・・」

二人は飽きて、もう言い返す気力も無かった。

「じゃあ行くべ」

そう言つと、俺は歩き始めた。

「しょうがねえな。バカに付き合うか」

桜木が言つと山本も同感し、二人も歩き始めた。

そして、俺達3人は山に向かった。

「これで何も無かったら、キン玉漬すからな」

桜木が言うと、俺と何故か山本の背筋がゾットした

『怖え〜』

俺と山本は軽く震えながら小さい声で言った。

すると桜木は大爆笑していた。

そしてくだらない話しをしながら歩き続けた。

それから4時間ぐらい経過した頃、俺達3人は山を目の前にした。

『すげえな』

俺達3人は山の迫力に、ただ呆然としていた。

そして、山の迫力に魅入っていると、俺達3人は一緒に我に帰った。

「あの・・・登ります?」

山本が言うと、俺と桜木は一旦考えた。

(こりゃあやばいなあ)

3人一緒の考えだった。

「とりあえず、明日にしないか？」

桜木が言うと、俺と山本もうなずいた。

そして、俺達は泊まる所を探すために来た道を戻り始めた。

そして、あるホテルを見つけた。

「ココにするか」

俺が言うと、二人も笑顔でうなづく。

そして、ホテルの中に入る。

「1つ開いてますか？」

俺はぎこちなく聞いた。

「1つでよろしいでしょうか？」

ホテルの人が言うと、俺は黙り込んだ。

「いいえ。2つで」

桜木が言うと、ホテルの人が申し訳なさそうな表情になった。

「すみません。只今、一部屋しか開いていないのですが・・・」

ホテルの人が言うと、桜木は嫌な顔をした。

「別に大丈夫ですよ」

俺が言うと、ホテルの人が鍵を渡した。

「お前はバカか？何で一部屋で良いんだよ」

桜木がキレている。

「はぁ？」

俺は何でキレてるか、分からなかった。

「お前にはデリカシーが無いのか」

桜木は顔を真っ赤にしている。

「お前もしかして、覗くとか思ってたのか？」

俺は桜木に聞いた。

「当たり前だろ」

桜木は恥ずかしがりながら言った。

「そんな事なら大丈夫。見る気はまんざら無いから。お前も無いだろ山本？」

山本に聞くと、山本がうなずく。

「じゃあ大丈夫だな」

桜木に言っていると、桜木は恥ずかしがりながら、納得した。

そして、3人して部屋に着いた。

「お前ら、こっから来んなよ」

桜木がそう言っていると、俺と山本はうなずく。

そして俺と山本は桜木に気を使いずつ、風呂に入ったりして、速めに寝た。

「なあお前ら、もう少し何か騒がないのか？」

桜木は俺達に聞くが、疲れていたので軽く喋って又寝ようとした。

「なあ……」

桜木は恥ずかしがりながら何か言いたそうだった。

「何かしたか？」

俺は桜木に聞いた。

「何か淋しい」

桜木はモジモジしながらようやく言った。

「じゃあ隣で寝るか？」

俺は桜木の異変に気付き優しく言った。

すると、桜木は何も言わずにこっちに来た。

「お前何かしたらキン玉潰すからな」

桜木は恥ずかしがりながら言った。

「ああ分かってるよ」

俺がそう言うと、やっと全員が眠りに着いた。

第十話：人捜し（3）（後書き）

今回の話は正直自信がありません。

しかし何が変

なのか分からないので、是非改善点を書いて下さい。

第十一話：人捜し（LAST）（前書き）

今回で人捜しが終了します

第十一話：人捜し（LAST）

「おい起きろ」

桜木の大声で俺は起きた

「何だよ、お前」

俺は爆睡していたので、何でココに居るかすら忘れていた。

「さっさと起きろ。山登るぞ」

桜木の一言で、やっと昨日の出来事を思い出した。

「ああ・・・山登るんだったな」

俺はまだ完璧に頭が回っていなかった。

「お前が言ったのに、お前が忘れてんのかよ」

桜木が言つと山本は笑った。

「じゃあ、ちょっと待ってる準備するから」

俺はそう言つと、身支度を始めた。

「よしっオツケー！じゃあ行くぞ」

俺がそう言うと、二人もうなずき、部屋を出た。

そして、ホテルのロビーで手帳を見せ、さっそうとホテルを出た。

「登る前に何か買っていくか？」

俺が言うと、二人も賛同した。

そして、近くのコンビニに入った。

いつも普通に来ているコンビニと何も違いが無いが何故かテンションが上がっていた。

「なあ何買っつ？」

俺が二人に聞くと、二人はクスクスと笑い始めた。

「お前って単純だな」

桜木が言うと、俺は耳が真っ赤になった。

俺達は色々と買い終えると山に向かった。

そして、10分ぐらい歩くと、山の目の前まで来た

「やっぱデカイな」

何度見ても唾然とする程の大きさだった。

「じゃあ登りましょう」

山本が言くと、俺と桜木は我に帰って登り始めた。

登ってる最中も、くだらない話して盛り上がる。

そして、7キロぐらい歩くと、桜木が疲れ始めていた。

「お前大丈夫か？」

俺は桜木に聞いた。

「バーカ！心配すんな気持ち悪い」

桜木が疲れているのは見て、すぐに分かるが見栄を張っていた。

「そうか・・・」

俺は心配したが、桜木と口論する程、俺も余裕がなかったから、しょうがなく納得した。

そして、半分に到達した頃、誰も口を開こうとしなかったが山本が、口を開いた。

「そろそろ休みませんか？」

（やっと言ってくれたよ）

俺と桜木は安心の表情になった。

「じゃあ休憩するか」

誰にカツコ付けてるのか分からないが、俺は余裕な感じで言った。

「皆が言うなら、休むのも良いかな」

桜木も同じ用な感じで、余裕なフリをしていた。

「じゃあ、あそこの岩にでも座るか」

俺が言うと、一斉に岩に座り始めた。

そして、コンビニで買った物を軽く腹に入れた。

「結構しんどいですね」

山本が言うと、さっきの強がりとは逆に、俺と桜木は、うなづいた。

そして、軽く休憩したら又、登り始めた。

最初の時とは違って、景色を見たりする余裕が出来ていた。

そして、頂点が見え初めて来た。

「頂点が見えたぞ」

俺が言うと、二人の顔が笑顔になった。

それからは、3人同じ速度で、横に並ぶ用に歩いた

そして頂点まであと一歩になった。

『せーの』

一斉に頂点に立った。

すると、俺達3人は膝から崩れる用に倒れた。

そして、一息突くと又、立ちはじめた。

そして、あの大きな木に近づく。

すると、木の下に誰か居る。

「あれ誰だ？」

俺がそう呟くと、二人も木に近づく。

見た感じは、30を過ぎたぐらいで、ごく普通の服装をしていた。ヒゲを生やしているというより、剃るのが面倒で、タダ伸ばしている感じだった。

「あのお・・・」

俺が話し駈けた。

すると、こつちを振り向いた。

「何か用ですか？」

嫌な感じはしなかったが何か片手間に返された気がした。

「何しているんですか？」

俺は丁寧に聞いた。

すると相手は、座っていたイスから腰を上げて、タバコに火を附けながら言った

「絵を描いてるんです」

相手はそう言うと、少し絵を見せてくれた。

絵は全て、桜の絵だった

俺は不思議に思ったが、絵の凄さに驚いた。

俺は良く分からないけどあきらかに有名な人が描いた絵より、迫力を感じた。

俺だけでは無く、桜木も山本も絵を見て驚いていた

「凄いですね」

俺は感動したまま言った

「これぐらいなら、拳げるか？」

相手はタバコを吸いながら言った。

「えっ」

俺はビックリした。

「これぐらいなら、毎年描けるから別に良いぞ」

相手はそう言うと、加えていたタバコを消し、携帯灰皿に入れた。

「いやぁこんなに凄い絵貰えないです」

俺は欲しかったが、もったいない気がして、受け取らなかった。

「そうか・・・」

相手はそう言うと又、絵を描き始めた。

「あのお・・・あなたはヤマナカ ショウウタさんですか？」

俺はやっと本題に入った

「どうして、知ってるんだ？」

相手はビックリしていた

「あなたは夢組の卒業生ですか？」

俺はとうとう、聞いた。

「ああ……」

相手はコクリと、うなづく。

「一緒に、母校に来て下さい。あなたが来ないと、1人の人が死ぬんです」

俺が言うと、相手は困惑していた。

「お前イキナリ何、言ってんだ」

相手は軽く怒りながら、俺に言った。

「あのぉ……俺達も良く分からないんですが、とにかく人の命が掛かってるんです」

俺は相手の目を見ながら必死に言った。

「分かりました」

相手は軽く間を置いたが納得してくれた。

「アリガトウございます」

俺が言うと、桜木と山本も頭を下げた。

「じゃあ、ちょっと待って片付けるから」

ヤマナカさんはそう言うと、絵の具や筆などを片付け始めた。

片付けを待つている中、俺達3人は景色を見ていた

「ヤッホー」

桜木が急に言うと、俺と山本も笑いながら言った。

『ヤッホー』

最後に3人一斉に言った

「この景色良いですね」

桜木がヤマナカさんに言う。

「でしょ！この景色見たら自分がちっぽけに感じるでしょ」

ヤマナカさんは笑いながら答えた。

そして、ヤマナカさんが片付け終わると、皆で山を下り始めた。

そして、絵の事など色々聞きながら、初対面とは思えないぐらい楽しみながら下りた。

そして、山を下り終わると、町の景色はオレンジに染まっていた。

「日が暮れちゃったね」

桜木が言うと、何故か悲しい気持ちになった。

「何か・・・疲れたね」

桜木の目には軽く涙が見えた。

『・・・・・・・・』

桜木が涙を流した事に驚き、言葉が出なかった。

沈黙が続くと、桜木が皆の視線に気付き、口を開く

「なんちゃって！皆、女の涙に騙されるんだね」

桜木は無理矢理創った笑顔で言った。

俺達はウソだと気付いたが、桜木に合わせて笑った

「時間も無いし、さっさと駅に向かうぞ」

桜木が言うと、俺達も歩き始めた。

そして、前回と同じく手帳を見せて、新幹線に乗った。

初めて見たヤマナカさんは、驚いていた。

「お前達は何でこんな所を通れるんだ？お前達は何者なんだ？」

「俺達は、あなたの後輩ですよ。夢組の生徒です」

第十一話：人捜し（LAST）（後書き）

いつも探りながら書いているので、最初とかなり違う設定になってしまいました

読む時かなり変に思ったと思いますが、最後まで御朗読アリガトウございます。

これからは気おつけるのでこれからも引き続き、御朗読をお願いします。

第十二話：ただいま（前書き）

今回が加藤が語り手になるのが最後になります。

第十二話：ただいま

ヤマナカさんと一緒に新幹線に乗り、蝶華高校に向かう。

新幹線に乗りながら、俺達はヤマナカさんに色々聞いた。

「昔の夢組って、どんな感じだったんですか？」

「うーん・・・静かだったかな」

ヤマナカさんは必死に考えたようだったが、返事はあっさりとした内容だった。

「一番の思い出って何ですか？」

俺は続けて質問をした。

「思い出・・・特に無いかなあ」

さっきと同じく、あっさりとした答えだった。

『・・・』

ヤマナカさんの言った内容に言葉を失った。

「今はどうなっているんだ？」

今度は逆にヤマナカさんが聞いてきた。

「今は・・・」

俺は言葉に迷った。

「今は昔と違って皆、仲良しですよ」

俺が変わって、山本が返事をした。

「そうですね。今の夢組は最高ですよ」

つられる様に桜木も喋った。

俺は二人の返事に驚いたが、正直嬉しかった。

「へえ〜！夢組も時代と共に変わったな」

ヤマナカさんは何か嬉しそうだった。

俺達はヤマナカさんに昔の夢組の事を色々聞いた。

昔の夢組も今の夢組も特に変わりが無かった。

誰とも喋らず、ただひたすら勉強をして、居残りする事なくすぐに帰る。

そんな、つまらない学校生活を送る。

それが夢組の伝統みたいな物になっていた。

「今の夢組は楽しそうだな。もう一回夢組に入学しようかな」

ヤマナカさんは冗談交じりの口調で言った。

「是非来て下さい」

俺が言うと、皆がクスクス笑った。

「あっ！降りる駅だ」

山本が言うと、俺達は新幹線から降りた。

そして、俺達はヤマナカさんを連れて、蝶華高校までの道のりを
楽しみながら歩いた。

そして、10分くらい歩いたら、蝶華高校に着いた

「なつかしいなあ」

ヤマナカさんはそう言うと、目に涙が溢れていた。

「やっぱり歳取ると、体と共に涙腺もダメになるな」

ヤマナカさんは涙を拭きながら言った。

「誰だって母校を見ると涙流しますよ」

俺がそう言うと、ヤマナカさんが笑った。

「じゃあ入るか」

桜木が言うと、夢組がある四階に向かった。

「何にも変わってないな」

ヤマナカさんは何かを見る度に同じ事を繰り返して言った。

「よしっ。四階だ」

俺がそう言っていると、ヤマナカさん自ら夢組の教室のドアを開けた。

バアーン

ヤマナカさんは勢い良く開けた。

教室には色々な資料を見ながら、何かをメモしている加西と飯田が居た。

「おお！おかえり」

飯田が言っていると、俺達も笑顔で返した。

『ただいま』

第十二話：ただいま（後書き）

最後まで御朗読アリガトウございます。
想及び評価の方よろしくお願いします。

出来れば、感

第十三話：友達（前書き）

今回から語り手が飯田に戻りました。

第十三話：友達

バアーン

勢いよく教室のドアが開くと同時に自分はドアの方を見た。

そこには見たこと無い人が居た。知らない人の隙間から加藤の姿が見えた。

「おお！おかえり」

自分は無事に帰ってきた姿を見て、嬉しかったが、最初に見えた人に気を取られたので、あっけない感じになった。

『ただいま』

元気な加藤と桜木と山本を見て、自分は笑顔になった。

「帰って来たって事は、人捜し完了したんだよな？」

自分は加藤に聞いた。

「ああ！もちろん」

加藤は自信満々で答えた

「まあ加藤は足をひっぱてたけどな」

桜木が笑いながら加藤をバカにした。

「それはお前だろ」

加藤も負けじと言い返した。

「まあまあ」

山本が慣れた手付きで二人の喧嘩を止めさせる。

その光景を見ていた、自分と加西は思わず笑った。

「山本は大変だったな」

自分がそう言うと、山本は苦笑いをした。

「まあ無事で帰ってきて良かったよ」

自分がそう言うと、全員が笑顔になった。

「シレイ クリア」

教室のテレビがつくと、前と同じ様にロボットの声が出た。

「よっしや〜」

加藤の大声と共にテレビから続けて何か聞こえた。

「みんな シュウゴウ」

テレビからは同じテンポで、ずっと聞こえた。

「皆が帰ってくれば良いのか？」

自分がそう言うと、皆はうなずいた。

それと同時にテレビが消えた。そしたら、自分達は一斉に電話をかけた。

「私は岩隈さん達を呼んできます」

加西が言うと、自分は目で合図をした。

そして、岩隈さん達が来ると、岩隈さん達も電話を始めた。

そして、全員に連絡がつくと、加藤から色々な話を聞いた。

加藤の勘で見つけた事や山で見た景色など、つい最近まで名前を知らなかった事を忘れるぐらい楽しかった。

すると、ヤマナカさんが口を開く。

「今の夢組は楽しいな」

「今の子？」

俺はヤマナカさんの一言に違和感を感じた。

「ヤマナカさんは昔の卒業生なんだよ」

加藤が言うと、自分は納得した。

「昔の夢組は誰供、喋らないで居残りする事なく、すぐに帰る。そんなつまらない学級だったからさあ」

（今と変わり無いじゃん）

自分は心の中で言ったが口にはださなかった。

「それに比べて、今の夢組は楽しいな、うらやましいよ」

ヤマナカさんは笑いながら言った。

「当たり前ですよ皆、友達と居ると、楽しみに決まっていますよ」

加藤が言った事で、自分の考えが変わった。

確かに、つい最近まで、名前すら知らなかった仲だけど……
今は

皆が友達だ。

第十三話：友達（後書き）

最後まで、御朗読ありがとうございました。
組をよろしく願います。

これから夢

第十四話：選択肢（前書き）

今回は色々な先生方から文章の事で色々と改善点を受けたので、自分なりに気おつけてみました。

第十四話：選択肢

加藤達がヤマナカさんを見つけたので人捜しの指令はクリア出来た。今は加藤達以外で外に居る人達を待っている。

「皆、遅いな」

自分が言つと、皆も共感する様になづく。

「まあ沖縄とかに居る人もいるからな」

加藤が言つと、周りが静かになる。

そして、沈黙が続く。それもしかたがない、最初の時は無事に加藤達が帰つて来た事や指令をクリア出来た喜びで、テンションが上がり、くだらない事でも楽しく感じたが、さすがに3時間経つと、話す事すら無くなる。

しかも、昔からの友人や恩師なら昔話で華を咲かす事が出来るが、ついさつき友達だと確信したぐらいの仲だと話す話題も限られてくる。

（ああ。暇だ・・・）

自分は心の中で叫び続けた。

そして、暇が極限状態になり掻けた頃、教室のドアが開いた。

『ただいま』

そこには、木村と中村と山田さんの3人が居た。

「おお！お帰り」

自分は暇でテンションが極限まで下がっていたが、木村達のおかげで又、テンションが上がった。

そして、加藤達が帰って来た時と同じ様に色々な話しを聞いた。山で野宿した事や山田さんが結構天然だった事や中村がリーダーシップを發揮した事など、話しを聞いたら又、テンションが上がってきた。

そして、木村達が帰って来るのを引き金に皆が続々と帰ってきた。そして、皆が続々と帰って来ると色々話しを聞いて、皆でバカ笑いでいた。

そして、ちょうど町が夕焼けに包まれた頃、全員が無事に帰ってきた。

「全員揃ったよな」

加藤が言うと、皆がうなずき、お互い目を見ると、皆が笑顔になった。

キンコーンカーンコーン

又、チャイムが鳴ると、アイツの声が聞こえてきた

「皆、無事に帰ってきたんだ。一人ぐらい死んでると思ったけど」
軽く笑いながら言った。

「やかましいわ」

田代さんが軽い口調で言うと、皆笑った。

「あれ？キレないんだ」

自分の考えていた事とは違う事を言ったのか、不思議そうに言った。

「安心しな。お前の正体があったら、キレてやるから」

軽く笑いながら言った。

「くっ・・・まあ楽しみにしてるよ」

一本取られたのか、初めて動揺した様だった。

「それより、ヤマナカさんを捜したけど、何が目的なんだ？」

「意味は無いよ。ただ君達に人捜しをして、失敗するのを楽しみにしていたんだよ」

アイツが言うと、皆驚いた顔をした。その中でもヤマナカさんが一番驚いていた。

「誰が一番難しいと調べていたら、ヤマナカが一番良いかなと思っただけ」

あっさりと言った。

「お前・・・」

田代さんも呆れて、言葉が言えなかった。

「まあこの後の行動はヤマナカ自身に任せるよ。帰りたいと思ったら、手帳見せれば良いし。残りたいなら残れば良いし」

「残るよ」

アイツが言い終わると同時にヤマナカさんが言った。

「ふんつ。まあ良いや人が増えても俺には関係無い」

開き直った様に言った。

「あっそうだ！予定より早く終えたからお前達にご褒美をやるよ」

アイツは又、意味の分からない事を言い出した。

「ご褒美は何にしよう？」

アイツは少し考えると又、喋り始めた。

「帰りたい奴は帰って良いぞ。ただし、帰った奴は夢組の生徒じゃ無くなる」

皆は内容を聞くと、呆然としていた。

「この勝負を逃げて、夢組から消えるか。最後まで勝負を続けて、夢組に残る。2つの選択肢を与えるよ。決定日時は3日後」

そう言うと、スピーカーから声が消えた。

『・・・・・・』

全員がこの状況を理解していなかった。

今までは、あまり意味が分かかってないまま行動に移していたけど、今回は意味は分かる。ただ、どっちが正解なのか分からない。

知らない内に始まっていた勝負。内容は遊びでは片付けられない程の内容だ。帰りたいたいと常に思っていた。

でも、何故か抜け出そうとはしなかった、チャンスはいくらでも合ったのに。

そして、今は抜けても良いと言われた。でも、今抜けたら、後悔する気がする。

(俺はどうすれば良いんだよ)

俺は心の中で何度も考えたが、結論は出なかった。

そんな事を繰り返していると、テレビが付いた。

すると、もう聞き慣れたロボットの声がした。

「ヒトリ ダケ ヘヤ」

「ハヤク イドウ」

同じテンポで、ずっと聞こえる。

すると、皆はもう雰囲気を感じたのか廊下に出た。そしたら、全部の教室のドアに名前が書いてあった。

俺の名前は、夢組から軽く離れている、3 2にあった。そして、皆が続々と自分の名前が貼ってあるクラスに入るのを見て、自分も3 2に入った。

教室の中は机など、普通の教室にある物が無く、布団やご飯などの食料があった。恐らくここで3日間考えろという事だろう。

いきなり1人になったら何か寂しくなった。

すると又、スピーカーからアイツの声が聞こえた。

「皆、自分の教室に着いたよね。

じゃあルール説明するね。今から3日間、自分がいる教室からは出れないから。そして、自分の選択肢が決まりしだい、勝手に行動に移して下さい。

残る人は夢組に、帰る人は勝手に帰るそのどっちかを3日以内に決めて下さい。3日以内に決めれない場合は、強制的に帰ってもらいます。

以上がルールです。じゃあ1人で頑張ってくださいね」

そう言つと、スピーカーから声が消えた。

「3日以内かぁ・・・」

自分はそう言つと、布団に入り、考え始めた。

第十四話：選択肢（後書き）

自分なりに頑張ったのですが、おかしい点などありましたら、是非
教えて下さい

第十五話：仲間（前書き）

今回も色々な先生から言われた所に気を付けました。

第十五話：仲間

今、自分は何で迷ってるのだろうか・・・

目の前で人死んで、自分達が失敗すると赤の他人の命が亡くなるとか意味の分からない勝負が始まって、そして帰りた奴は帰って良いと言われた。

普通なら『帰る』の選択肢しか出てこないはずだが何故か自分は迷っている。

(何を迷っているんだ。帰れば全てが済む話だ)

俺は何度も心の中で繰り返したが、何かが邪魔をして、イマイチ気持ちの整理出来ない。

「ああ・・・どうしよう」

今思うと今まで自分で物事を決めた事が無かった。全ての事を人にあわせて生きてきた。

夢組に入ったのも、自分の意思じゃなく、周りから色々教えて貰って、気付くと夢組に入っていた。

今思うと、自分の意思で、ちゃんと決めれば良かったと、今更になって、後悔している。

「よしっ！明日からはちゃんと考えよう」

自分はこの状況から逃げたくて、『寝る』という選択を取った。

(俺のこういう所が、ダメ何だよなあ)

自分は反省したが、今まで非常識的な事が色々と、立て続けに起こったので、心身共に限界が来ていたので、すぐに爆睡した。

そして、朝が来た。

まだ疲れが完全に取れていないのか、体が重く感じた。しかし、何とか起き上がり、教室にある、食料を適当に漁って食べた。

「ああ・・・どうしよう」

自分は今だに考えがまとまっていなかった。帰りたいたい気持ちに変わりは無いが何か邪魔をしている。

（ああ・・・自分ってダメだなあ）

何度も心の中で自分を責め続けた。今まで何でも人に合わせていた自分を責め続けた。

そして、段々と責めていた物が、自分自身から自分の人生と変わった。

（自分の人生って・・・）

心の中で必死に考えた。自分が今まで生きていた理由。何度も死にたいと思った事はある。

テストの成績が悪かった時に親の怒り顔を思い出して死にたいと思

った時。

前から好きな人に告白してあっさり『無理』の一言で片付けられて、悔しさと切なさを消すために死にたいと思った時。

今まで、死にたいと思った事は一杯あった。

でも、自分は生きている。自分が生き続けても、社会には何も意味が無いかもしれないけど、自分はちゃんと生き続けている。

生きている理由・・・それは、ただ死にたくない。それだけの事だが、自分は嬉しかった。

今まで人に任せていた人生だと思っていたが、一個だけ自分で決めていた事があった。

一個しか無かったが、それは、自分の人生を続けるか終わらせるかという人生最大の選択を自分で決めていた。

（自分の事は自分で決める。例え、それが間違っても後悔はしない。それが自分の人生だから。）

心の中で決めた、この事を一生忘れないと。

「もう迷いはない。自分は夢組の生徒だ。夢組で起きた事は、自分にも責任がある、だから逃げない。

それに仲間は一杯居る。仲間の事は裏切らない」

1人しか居ない教室で精一杯叫んだ。そして、胸を張って教室を出た。

その時の自分には『後悔する』という選択肢は無かった。そして、自分の力で、『逃げない』という選択肢を決めた。

そして、夢組のドアの前に着くと、自分は勢い良くドアを開けた。教室の中には加藤、岩隈さん、田代さん、木村、桜木、中村、加西

の仲間が居た

「やっぱし、お前も残ったか」

加藤が言うと、教室に居る皆が笑顔で迎えてくれた

「ああ！当たり前だろ」

自分の選択肢に間違いは無かった。ちゃんと仲間が笑顔で迎えてくれた。

自分で物事を決めた事と仲間が居てくれた事が、嬉しくて涙が止まらなかった。

「みんな、アリガトウ」

自分は泣きながら、言った。それを見ていた皆は驚きながらも、笑顔で返してくれた。

『どづいたしまして』

この言葉を聞くと、自分は、泣顔だが無理矢理、笑顔を作った。

第十五話：仲間（後書き）

今回はかなり読みにくかったと思いますが、すいませんでした。

悪かった点を書いてもらえると、改善しやすいので、是非書いて下さい。

第十六話：8人（前書き）

今回は無理矢理、話しを書いたので、おかしな点があるかもしれ
ません。

第十六話：8人

自分が夢組に残る事を決めてから何時間か経過した。

ちよつと前まで、28人居たクラスだが、今は自分を含め8人しか居ない。これから後、何人戻って来るのかは誰も予想出来ない。もしかしたら、もう誰も来ないかもしれない。

「後、何人が来るかな」

加西が皆に聞くが、誰も確信を付いた答えはしようとはしなかった。誰が残っていて、誰が帰ったか、さえ誰も分からないのだから仕方がない。

特に何も起きないまま、時間だけが経過した。時計を見ると、ちよつと1時を差していた。自分はそれを見た途端、急にお腹が空いた。

「なあ腹減らない？」

自分は皆に聞いた。男達は『待ってました』と言わんばかりの元気な声で返してくれた。そして、女達は恥ずかしがりながら、頷くだけだったが、桜木が代表して答えた。

皆が腹を空かしているのを確認すると、自分と加西で1人で居た教室から皆の食料を取って来る事にした。

そして自分と加西が食料を持って来て、皆に配って一緒に食べた。

食べ終わると、皆と色々話しをした。最初は『これから誰が来る

か』とか『これから何が起こるか』みたいな大事な話だったが、最終的には『寝る時は誰が隣になるか』みたいな下らない話になった。

その時の自分達には、命の掛かっている勝負をしている事は頭に無かった。

色々な話しをして盛り上がり、気付くと夜の10時になっていた。自分は前から夜に弱く、この時間に寝ていたので、睡魔が来ていた。

「そろそろ寝ませんか？」

聞いたのは自分じゃなくて、岩隈さんだった。

「そうですね。もう夜ですから、寝たい人から勝手に寝ましょう」

田代さんが言うと、皆も賛同した。そして、岩隈さんは教室の後ろに行つて横になった。もちろん夢組にはベットの様な寝具は一切無い。だから、床に寝そべる事しか出来無い。そして自分も岩隈さんに続いて、教室の後ろに行つた。すると皆が一斉に移動を始めた。結局、皆で一斉に寝る事になった。

「誰も来なかったね」

加西が言うと、皆が黙り込んだ。

「明日になったら、皆来るよ」

桜木が言うと、皆も賛同した。そして、皆で『おやすみ』と言って就寝についた。

第十六話：8人（後書き）

今回はいつも以上に読みづらかったと思います。次回までに直したいので、是非とも改善点をよろしくお願いします。

第十七話：友情（前書き）

今回は久しぶりに、2ページになりました。

第十七話：友情

「皆さん、起きて下さい」

岩隈さんの声で皆起きた。そして、眠い目を擦りながら体を起こして周りを見渡すと、昨日まで居なかった山本の姿があった。

「自分も残る事に決めました」

山本が笑顔で言うと、皆も笑顔で返した。山本が来た事で昨日よりは皆、安心した表情になっていた。

そして、朝飯を食べるために昨日と同じく、バツクの中を漁った。そして、皆が食べ終わったら、昨日と同じく、下らない話して盛りあがった。

そんな感じで盛り上がって居ると教室のドアが開いた。

バアーン

そこには山田さん、佐藤それから佐々倉の姿があった。

「遅れました」

山田さんが言うと、佐藤と佐々倉は何も言わなかったが、笑顔でこつちを見ていた。

「おお 一気に来たな」

田代さんが言うと、自分達は笑顔で3人を迎えた。そして、3人を入れて又、バカみたいな話しをして、盛り上がった。そして、盛り上がっているとスピーカーからチャイムの音が聞こえた。

キーンコーンカーンコーン

すると案の定、アイツの声がした。

「バカが多いな夢組には。自分もこんなバカと同じクラスに昔居たと思うと嫌になるね」

アイツのムカつく感じの声も聞き慣れたのか、冷静に聞けるようになった。

「まあ、お前達はマシな方だ。あと1人だけ迷ってる奴に比べたらな。そいつは夢組の生徒でも無いのに、悩んでる、救い様のないバカだからな」

アイツがバカにしているのは、100%ヤマナカさんの事だ。という事はヤマナカさんと今夢組に居る人以外は、全員帰ったんだ。

「なあヤマナカ、お前しか居ないからさ、制限時間を軽く早くしたから、あと1時間で決めろよ」

アイツがそう言うと、スピーカーから音が消えた。すると、廊下の方から誰かが走って来る音がした。その音は段々と大きくなり、確実に夢組に向かっていく音だった。

(何かが近づいている)

全員に緊張が走った。

田代さんと加藤は喧嘩をする様な殺気が出ていた。

バァーン

勢い良くドアが開くと、そこにはヤマナカさんが居た。

「よっ！俺も残るわ」

ヤマナカさんだと分かると、自分達は安心した。特に田代さんと加藤は誰よりも力が入っていた分、膝から崩れていた。その光景を見たヤマナカさんは笑いながら夢組に入ってきた。

「いやあ、寝ていたら俺しか残っていないとかアイツが言ってたから、急いで来たよ」

ヤマナカさんが言うのと、緊張していた自分達がバカらしく思い、笑う事しか無かった。するとテレビからロボットの声が聞こえた。

「シレイ クリア」

それを聞くと、皆が安心した表情と共に、達成感で胸が一杯になっていた。

そして、テレビが消えると又、チャイムが鳴った。

キーンコーンカーンコーン

それが鳴り終わると、アイツの声が聞こえてきた。

「いやあココまでバカだと逆に感心が持てるわ。これだから、お前達は人間じゃないんだよ。」

お前達が帰れば人の命だとか勝負だとか非現実的な事全てが終わるのに、何で残ってるわけ？お前達の考えはわからんわ」

アイツは笑いながらも、何かキレてる様にも聞こえた。

「確かに自分達はバカかもしれない。こんな意味の分からない世界から逃げずに立ち向かっている。しかも赤の他人とは言え人の命が関係している勝負。普通なら帰るけどよ・・・これは自分で決めた事だ、お前にバカだつて言われる権利は無いんだよ」

アイツが自分の考えをバカにしている感じがして、ムカついたからキレた。

皆は自分がいきなり大声を出した事で驚いていた。

「ふんつ。何を正義みたいに語ってるんだ。

確かに、お前が決めた事だ俺が何か言う事じゃない。でもよ、お前は人の命が掛かっている事を知っていて決めたんだよな？

お前が選んだ道は人の命より自分を優先した事にならないか？」

アイツは自分に問い掛ける様に言った。

「確かに自分は人の命を掛かっていると分かって決めただけど、自分を優先なんかしていない。

自分はココに居る仲間と離れたくないから残った」

さつきとは、うってかわって冷静に自分は答えた。

「仲間ねえ・・・その仲間は同じ気持ちかな。

お前の意見は自分の考えでしか無いんだよ」

「……」

自分は返す言葉が無かった。それから、沈黙が続くと今度は加藤が口を開いた。

「お前言い返せよ。安心しろ、ココに居る皆が仲間だから」

加藤が言つと皆が賛同してくれた。自分は又、自信を持った。

「どうよ。ちゃんと仲間だと認めてくれたぜ」

自分は嬉しくて涙が出そうだったが、なんとか耐えた。

「ふんっ！熱い友情だね。つい最近までは名前も知らない仲だったとは思えないね」

アイツは軽くバカにしながら言った。

「友情に日にち何て関係無いんだ！一緒に笑えば友情が出来んだよ」

自分は腹の底から声を出した。アイツに聞かせるためじゃない。教室に居る仲間に聞いてもらうために、精一杯叫んだ。

第十七話：友情（後書き）

今回も御朗読アリガトウございます。改善点や評価の方をお願いします。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0885c/>

夢組～人の居ないクラス～

2010年10月9日20時44分発行